

# 婦人と子ども

第十三卷第五號

## 保 姆 論

### △保母に關する二様の見解

まるくと肥えて、林檎の様につややかな頬。深紅のリボンを蝶々に結んだ、ふさふさとした垂髪。鈴の様につぶらに、睫の長い黒目勝ちの、朝の露にも似た清い眼。もの言へば指でついた様な深蹠が出来て、眞珠を植えた可愛らしい齒並のこぼれ出る、乙女椿の蓄にも似た口もと。英吉利風に幅廣の雪白なカラーに、きちんとした蝶結びのネクタイに、瀟洒に取りすました小公子。ゆつたりとした白エプロンの下は、目のさめる様なメリンス友染の元祿袖に、とき色のへこ帯がよく似合

ふ快活な小公女。……斯ういふ可愛らしい幼児達を相手にして、別に定まつた課業があるではないし、浮き立つようなマーチの曲に、可愛らしいクラッピングの調子をあはせて、蝶々の眞似をして見たり、鳩に豆をやる眞似をして見たり。遊園のお山登り、池めぐりがあきて來れば、昔々のお伽噺。一番むづかしい事といふのが折紙粘土細工位のもの。要するに玩具と歌と遊びとで子供と一しよに笑つてさへ居ればよいのである。世の中に保母ほど氣樂な、面白い一方の仕事はないと言ふ人があ

る。  
そうかと思ふとまた一方には之れと正反對に、

いやだ、年が年中子供のお守りばかりして、あんな世話のやける、小面倒な、うるさい仕事は、死んでもいやだといふ人がある。そういう人から見た保母の仕事は、世にも一番骨の折れて、気が疲れて、而して要するにくだらない苦勞一方の仕事なのである。

どちらにしても、實際に就てよく考へて見なければ分らない。

### △保母の苦勞

保母その人に訊ねて見たらば、其の仕事をつらいもの、いやなものだと言ふ人は一人も無い。そんな人のある筈は無いのである。しかし、保母の仕事は局外の人が表面から見ると、氣樂一方、面白一方のものでは決してない。

ほんとうの理屈からいへば、子供と遊ぶといふことが、實は非常に六かしい、深い心づくしを要することなのであるが、それは先づ暫く別問題とし

て置いて、ただあゝやつて毎日々々子供と楽しく遊んで居るといふこと丈で、それ自身容易のことでないのである。一日半日ならば一生懸命子供の相手は誰れにも面白いものである。しかしそれが毎日である。永く、繰り返かへされて居るのである。退屈まぎれにたい一寸子供と遊ぶ時の面白さを以て、保母の仕事としての遊びを律し得る譯のものではない。永い間には、氣分の悪い日もあらう。胸に一身上の心配のあることもあらう。出来ることならば一日何もしないで考へて居たいようなこともあらう。殊に保母には物思ひ易い若い年頃の人が多い。何彼につけて心に動搖の起り勝ちなものである。しかも毎日同じ様に機嫌よく子供と遊んで居なければならぬのである。——そんなことは保母の仕事に限つたことではない。總ての勤務に伴ふものだといふ人もあるかも知れない。誠にそうに相違ない。併し保母の仕事が外面如何にも氣樂千萬に見える爲か、保母の苦勞を之れだ

けにも察して居て呉れない人がある。實際毎日あ  
あやつて子供と楽しく遊んで居るといふことは、  
誰れにでも出来る容易なことではないのである。

尤も人は結果さへ得られるならば、途中は容易  
く忍び得るものである。尙ほ又結果があるといふ  
手答へさへあるものなら、それだけでも途中の苦  
勞が慰めもされ、忘れられもするものである。然る  
に保母の仕事は此の「手答へ」なるものに於て最  
も弱い性質のものである。理論上の結論や、經驗  
上の自信は兎に角くも、日々その時々、之れだ  
け遊んだから、子供に之れだけ利益があつたとい  
ふ風の手答へは全くないのである。之れが學校の  
教育となれば、如何に下級であるとしても、讀本  
を一枚教へた、九九を一つ覚えさせたといふ處に、  
目に見えた結果がそこに現はれて居る。保育の仕  
事では、それさへ少しも得られないのである。極  
端にいへば、こゝやつて毎日々々して居ることが、  
果して如何に効驗のあることが、疑ひ出したら分

らなくなるものである。自分の仕事に手答へのほ  
しいのは誰れでも同じであるが、若い者には殊に  
それが強い。それも仕事に無責任な呑氣家ならば  
兎に角く、熱心家誠實家になればなるだけ、仕事  
に手答がほしいものである。身を碎いても手答の  
あることがし度いといふが熱心家の心理である。  
それが毎日同じように、積木を積んでは崩し、崩  
しては積んで居るのでは、結果を急ぐ血氣の若い  
者には、如何にもまだるこいことである。しかも  
保育といふことが本來斯ういふ性質のものである  
とすれば、疑はず惑はず、急かす焦らず、一貫し  
た努力を以て、毎日の「遊び」をつづけて居なけ  
ればならない。これがながく、以て容易のことと  
ないのである。

立つて居る時間の多い爲に、身體の疲勞の大い  
なることや、その爲に被むる生理上の諸害や、幼  
兒の世話のこまかくと手のかゝることや、一刻も  
頭の安まらぬ氣苦勞や、之れ等のことは敢て言は

ない。それは外からも分ることである。たゞ局外から見ただけでは分らない保母の苦勞の中には右に述べたやうな、人の知らない大苦勞があるのである。心に悲しいこと、つらいことがあつても、三百六十五日機嫌よく子供と一しよに笑つて居なければならぬ。教育と言つても其日々には殆んど何の手筈へもない様のこと、しかも熱心に一生懸命で子供と遊んで居なければならぬ。此の孰れかで、保母の心は人知れぬ苦惱になやむことが時々ある。

### △保母の慰勞

何事も眞の苦勞は局外からは分らないが、眞の慰勞も局外からは測られぬものである。局外から分る様な苦勞は、らくな方の苦勞である。局外から測り得られる様な慰勞は、淺い慰勞に過ぎぬことが多い。眞の慰勞は常に我が個中のものでなければならぬ。

又、世にいふ大抵の慰勞なるものは、其の仕事から見て間接のものであることが多い。御苦勞でした、先づお茶を一つといふ類のことを、慰勞々々といはれて居る。勿論それも確に一つの大きな慰勞である。慰勞する方の眞心から云つても、慰勞さるゝ方の感じから云つても、確に一つの慰勞である。併し、すべての眞劍な仕事は、そんな間接のことのみで慰勞せらるゝものではない。寧ろさういふ間接のことゝは全く無關係に、仕事そのものから直接的の慰勞を與へらるゝものである。而して教育者の慰勞は皆此の種のものである。その勞力、苦勞に對して、如何なる多大の間接的慰勞と雖も、到底之れを充分に報ふるに足るものではないのである。教育そのことから生ずる直接的慰勞ほど、眞に教育者を慰勞し得るものは無いのである。

人知れぬ大苦勞のある保母の仕事も、此の直接的な人知れぬ大慰勞を有して居る。それは他でも

ない、人間の中恐らく一番清淨無垢な幼児の心から、清淨無垢の愛を受取り得ることである。そういふ幼児達から信用と尊敬とを以て深く親しみ慕はるゝことである。實に此の人知れぬ慰勞一つに保母は其の總ての苦勞を忘れ得るのである。

其の勞力の大きいことに於て、その間接的慰勞の途の甚だ薄きことに於て、保母は決して割のよい仕事でもなく、羨むべき位置でもない。少くも現在に於ては、世に最も慰勞少なき仕事の一つである。しかし、一度よく、自ら個中の眞味を味ふことの出來た人に於ては、之れ程楽しい、之れ程幸福な、之れ程慰勞多き仕事は無いと謂はれて居る。あゝ／＼實に愉快です幸ですとは、尊敬すべき熱心なる保母諸君の口から、屢々漏るゝ、自白である。而して此の慰勞を得ることなくして保母の業に従ふて居る人があつたら、恐らく其の勞に堪えぬことであると思ふ。

### △保母の歡喜

毎日々々の保母の慰勞は、即ち幼児に直接し、幼児と相親しむことから自然に得られて居るのである。しかも保母の仕事は、此の日常の慰勞の外に、時あつて大いなる特別の歡喜に遇ひ得るものである。即ち保育上何か特別に困難なる幼児があつて、特別の苦心、特別の勞力を盡した末、多少なりとも其の結果の得られた時、初め其の幼児の爲に注いだ悲みの涙は、茲に非常の大歡喜と變じて、保母の胸は喜悅の大濤に濤立ち轟く思ひがするるのである。素より困難の程度に従つて、歡喜の程度もいろ／＼に違ふものであるけれども、此の純粹なる保育上の喜びによつて、保母は其の仕事で天下何ものにも替へ難きものに思ふ様になるのである。

但し、その「結果」なるものは、外から見て決して大いなる結果、美事なる成功に限つたことでは

ない。前にも一寸述べた通り、他の多くの仕事に比べて、一つ／＼手答へもなく、著しい目の前の結果もないのが幼児教育の一つの持前である。もし手答へと常に目ざましい成功とをのみ期待する人は、失望するか無理な結果を作るかの二つに終らざるを得ないのである。そういふ期待の強い人は、神童だけを集めて教育するか、乃至猿が山雀にでも藝を仕込んで、見物人を驚かすがよい。普通の幼児教育は元來がそういふ譯のものでないのである。そこで保母が非常の歡喜として居ることも、局外者から見たら何でもないことであることもある。時には幼児の心に一分の進歩、一厘の發達がほの見えたとして、保母は嬉し涙に泣くことがある。戦勝の純忠將軍が凱旋門をくゞる時と同じような眞摯の感激に胸ふたがる思ひをすることがある。蓋し結果の大小が此の歡喜を生むのではなくて、保母の熱誠努力そのものが、之れを生むのであるからである。

大きい努力から些少の結果を得て、そこに大歡喜を感じることに於て最も強甚なるものは彼の白痴教育家であらう。教育の効果に於て其の期待最も僅少なからざるを得ざる此の教育は、局外者の目よりすれば殆んど常に無効なる努力を爲して居るもの、如く見ゆるものである。若し結果の著大を以て人若しくは自己に誇らんとする心から此の教育をするものがあつたら其の人は失望とならざるを得ないのが常である。其の大努力小結果の點に於て、保母の仕事よりも實に一層なるものといふべきである。即ち此の白痴教育家が其の仕事から其の慰勞と歡喜とを得るの狀は、保母の眞の歡喜が如何なる性質のものなるべきかを語るに最も適當なるものである。即ち吾人の常に敬嘆尊崇せる彼の白痴教育の大家リチャード氏が、シルヴェーナスを教育することによつて得たる歡喜の狀を、我國人中同種の經驗を最よく理解し、最強く感興を得る人の筆によつて茲に學び度いと思ふ。

「該兒は八歳半にして自己の母と他人とを區別すること能はず試みに光輝ある物體を其目に近づくるも聊羞明を感ずることなかりし。其の下肢は麻痺して歩行すること能はず。痛覺觸覺さへも異常ありし。リチャード氏は一度彼を見るや同情の念禁じ難く、如何にもしてこれを教育せんものと、先づ兩手に彼を抱き、これを撫で、これに飲食せしめ殆ど一ヶ月の日子を該兒の研究觀察に費せり。既にして以爲らく先彼を教育せんと欲せば自ら彼の位地彼の程度に下らざるべからずと。之れ實に氏が成功の秘訣なりし。氏は先三ヶ月間殆んど毎日毎時間倦まず屈せずして彼の爲に或書を朗讀せり。而して其これを讀むや對手の無知無勞なる白痴なることを念頭に浮ぶることなく、眞實知識ある教育ある人の爲に朗讀するの心となり、其の態度を以てこれを續けたり。氏が赤誠の無感無覺なりし彼の心に響きやしけん。遂に稍心を氏の首聲に傾くるに至れり。一日氏は該兒の傍に坐し默讀して少しも聲を發せず、以て私に其の舉動如何と注意せしに、彼は頗る物足らぬ心地して不安の状態にありしかば、氏は例の如く溫顔を以て彼に近づきシルヴエーナスよ、汝は余を要するや。よし余はこゝにありと云ひしに、こはそも如何に、彼はアーと一聲發しぬ。こゝに於てか氏は確に彼に第一の欲望を植へつけたり。彼は實に氏を要せしなり。依りて氏は更に二三月の間同じ朗讀をつづけし後一日再び默讀を試みしに、此度は彼何事かなさんとするものゝ如くなりしかば、其の爲すさままいに任せて少しも妨げざりしに、彼は徐々に手を挙げ指頭をリチャード氏の唇に觸れたり。依りて氏は再び讀まんことを余に求むるやと言ひつゝ再び朗讀を始めたなり。かくて第二の欲望

植へつけられぬ。それより氏はいつも先該兒に氏が唇を開かして後讀むことせり。遂に彼は微笑せり。これ彼が生來始めての笑なりしとぞ。リチャード氏の喜び何ものかこれに如かん實に積日の勞に報い得て餘ありと云へり。該兒はその後も益々發達し且常に氏を慕ひ氏と共にあるを以て無上の快樂と存せりかかりし程に彼は一日其四肢を動搖し始めしかば、彼の手を伸べ膝を屈めて葡萄を教へぬ。これ實に彼が學校に入りしより一ヶ半年の後なりし。此時氏は熟々考へぬ。彼に言語を教へ得べきかと。彼は其時まで未だ一語も發せざりしなり。氏は彼に向て『此手を動かせ』甚可なり』次に他の手を『そはよき兒なり』『此度は此足を』甚可なり』次に他の足を『そはよき兒なり』と毎日同一の言語を反覆し同一の所作をなさしめつゝ數日を過せしに、遂には單獨にてこれを試みんとし、且其唇頭の稍動きつゝあるを認めしかば、氏は試に耳を彼が口に近づけしに、不思議なるかな、彼はリチャード氏がさきに反覆せし『此手を動かせ』甚可なり』云々の言語を獨語しつゝありし。即ち氏の言語を耳にして、自らこれを語らんとする迄に至りしなり。彼が發達はこれに止らざりき。リチャード氏は實物教授を始める。氏は彼が爲に一足の靴をあつらへ、其の製造の様を見るべく毎日彼を革屋に伴ひ、店頭の靴を指しつゝ、こは何ぞシリヴェーナスと、氏問へば、彼は靴なりと答ふ。それを製造せしものは誰ぞと、氏問へば靴屋なりと答ふ。又パンを指しこれは何ぞと問へばパンと答ふ。それを製せしものは誰ぞと問へばベソシー(女子の名)と答ふ。或日氏は林檎をして、其名を問ひしに林檎と答へぬ。依りてそを造りしもの誰なるやを問ひしに知らず

と答へぬ。試みに靴屋ならずやと問へば然らずと答へ、ペソシ  
ーにあらすやと問へば又然らずと答へぬ。是に於て、他の日課  
を授くべき時は來ぬ。

一日氏に朝早くシルヴェーナスを二階に伴ひ、旭日の東天に輝  
く様を見せつゝ太陽と教へしに又彼太陽と繰返しぬ。依りてこ  
れを造りしものは誰ぞ、神と教へしに、彼は神と繰返へしぬ。  
既にして、氏は該兒を殘してこゝを去り、程經て教室に於て再  
び彼に會せしに、彼は殊勝にも窓にもたれしまし、他の兒童を  
慶きて、そは何ぞリチャヤ、太陽へ答へてチャヤ、そを造し

ものは誰ぞ、神と答へよチャヤと、頻りに自己に教えられ  
しまゝの言語を繰返へしつゝありし。此日彼は幾多の兒童を一  
人毎に顧みて、同一の教授を試み、少して倦怠の状なかりしか  
ば、リチャヤド氏は感極まりて云ふところ爲すところを知らざ  
りしと云ふ。………(瀧の川學園長石井亮一氏著「白痴兒、其  
研究及教育」一三四—八頁)

誰れかいふ。我結果は我が勞に酬むないと。教  
育は骨ばかり折れる苦業だと。其の人は此の大歡  
喜の寶庫へ入りながら、取り得べきものを自ら取  
らずして不平ばかり云つて居る人である。普通の  
幼児教育は白痴教育よりらくな丈げ、白痴教育は  
どの大歡喜は得られないかも知れないけれど、他  
の年長兒童の教育よりも一層世話がやけ、餘計に

骨が折れるだけに。それだけ他の教育よりも、  
必ず大い歡喜が得らるべき筈なのである。リヤ  
ード氏程の同情と忍耐と勞力とを以てすれば、どん  
な幼兒に對しても歡喜すべき何かの結果が得ら  
るべき筈なのである。

### △保姆の第一資格

保姆の資格を論じたならば、見方によつて色々  
に言へるであらう。また種々のことが其の必要の  
條件内に數へられるであらう。しかし、保姆の苦勞  
に堪え得る人、保姆の慰勞に満足する人、保姆の歡  
喜を其の第一の歡喜とする人、之れをこそ保姆の  
になれる資格のある人と云ふべきだと思ふのであ  
る。

眞によく之れ等の三條件を具ふる人は、即ち眞  
によく幼児教育に適し得る人である。何が何でも  
此の三條件に缺くる人は、到底幼児教育者には適  
しない人である。幼児教育の學問上の研究者、幼



兒教育の事務上の監督者、幼兒教育の思想上の獎勵者、そういふ人々の資格には必ずしも此の三條件が絶對の必要ではないかも知れないが、併し實際に幼兒に接して、直接に其の教育の任に當る人には、之れが何よりも缺くべからざる資格である。資格などいふ究屈な言葉を用ゐないでも、之れなくして保母になることは其の人の苦痛であつて、之れあつて保母になる時、其の人は最幸福な人なのである。

但し、斯ういふ心を持つて居るだけで、保母の

任務が完全に盡し得るといふ譯ではない。それには保母の素養も要る。保母の練習も要る。保母の經驗も要る。併しそれは保母のハタラクに屬する要件である。いくら此方の條件が具つても其の人が保母になれる人柄でないならば、矢張りほんとうの保母にはなれないのである。即ち之れを保母の第一資格と名づけた譯である。以下保母の第二資格第三資格と順々に考へを續けてゆかなければならない。

## 英文學にあらはれたる子供 (五)

### 『トム』と『マギー』(上)

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

「トム」と「マギー」は「ザヨウ・シ・ハリオット」(George Elliot)の作 The Mill on the Floss と云ふ小説中の主人公たる子供で「トム」は兄で十三歳「マギー」は八歳の妹である。

「トム」の歸省——兄妹の對話——喧嘩——マギーの苦痛——仲直り——魚釣

「まあさん僕の衣囊ポッケットに何が入つて居るか分らないでせう。」と「トム」は密かに「マギー」を座敷の片